

# 日本に半世紀

## —日本を愛した三人の司祭—

齊藤恵子

はじめに

二〇〇四年秋から大妻女子大学比較文化学部の半期の授業で、「日本における異文化」を担当することになった。十六世紀にフランシスコ・ザビエルが日本にキリスト教を伝えたが、本格的に日本に紹介されたのは明治以降である。日本人にとって、今でもキリスト教は、異文化として、異質なものと感じられる面と、普遍的な真理をもつものとの両面をもっている。キリスト教が日本における異文化であると言い切れるのかどうか、ためらう気持ちもあったがあえて、「異文化としてのキリスト教」を考えることにした。

二千年の伝統をもっているキリスト教を、十五回内外の講義で、何とか理解してもらおうというのは、至難の業である。四十年間、聖書と取り組んでいても、まだわからないという聖書学者をみていると、十五回で何ができるかと、ひるむ心もめばえてくる。

けれども、比較文化学部の学生にとっては、キリスト教の知識はやはり必要である。「キリスト教は二千年の歴史をもっているので、半年の授業で理解しきれものではない。それでも『いま・ここ』すなわち、二十一世紀の日本で、比較文化を学ぶ者にとって、意味のある授業でありたい。そのためには、受講生一人一人の解釈や感想がきわめて大切なものとなります」とシラバスに書いた。

ドイツの新約聖書学者にブルトマン（1884～1976）という人がある。新約聖書研究史上、衝撃的だと言われた、新約聖書の「非神話化」というものを提唱した学者だが、今ここでブルトマンの唱えた「非神話化」に詳しく立ち入るつもりはない。ただ、ブルトマンの主張を、「科学技術の発達した現代社会に生きるわれわれに、知性を犠牲にすることなく、納得できるやり方で、聖書と取り組み、キリスト教を信じつづける力を与えてくれた」<sup>(1)</sup>と評価している研究者の解説を読み、この言葉に共感を覚えた。

キリスト教の信仰箇条にある、キリストが聖霊によってマリアに宿ったとする処女懐胎や、死後三日して、キリストが「復活」したという教義を、文字通り、そのまま信じなければキリスト教に入れなと言われれば、現代人の多くは、たじろいでしまうであろう。知性を犠牲にすることなく、キリスト教の核心を理解することは困難であろうか。たとえ困難であってもそれを試みることは必要である。

二〇〇四年に、新約聖書学者、田川建三の『キリスト教思想への招待』という本が出た。余計な要素をスッパリと斬り捨てて、創造、教会、救済、終末というキリスト教の核心が、

ひじょうにわかりやすく、切れ味よく解説されていた。二十五年前の同氏による『イエスという男』（一逆説的反抗者の生と死― 三一書房 1980）が読んでいたじろぐほど、鋭く批判的であったのに比較すると、この書の田川氏はすぐれた遺産としての基督教の肯定面を評価している。

田川氏は言う。「何せ古今東西二千年にわたって、非常な広がりを持って存在してきたものである。……これだけ巨大な広がりであれば、数多くの害悪も流してきたし、うさんくさい部分、くだらない部分も大量にある。けれども他方では、現在の人類にとっても極めて貴重なものの考え方や姿勢がいろいろと伝えられている。それを十分に学び、広く伝える必要がある、と思う。せっかくの貴重なものを、十分に汲み取らないとしたら、もったいないことである。」<sup>(2)</sup> 私は、害悪もあり、うさんくさい部分があるが、同時に現在の人類にとって極めて貴重なものを持っているという、基督教のとらえ方に同感する。

また、基督教思想の概論なんぞ、書くことはできない。これが基督教です、などというものを定めることなどできない。その気になれば、何か一つのことを基督教の中に見つけたら、必ずその反対のことも同じ基督教の中に見つけられるのだという田川氏の言にも同感する。<sup>(3)</sup> アパルトヘイトや、奴隷制を考えても、それを支持する思想も、それを否定する思想も、同時に基督教の中に見出すことができるのであろうから。

それともう一つ、最近私が感じるのは、日本人の中に脈々と流れている、仏教的なものへの親近感である。昨秋、この授業を始めた頃に読んだ「父は死にゆくことをどう考えたか」という、社会学者副田義也氏の一文（2004年11月30日 東京新聞夕刊）もその一つである。基督教の牧師を生涯の職業とした父上が、心身の老衰した最晩年に、三途の川のほとりにいたという夢をみたと言ひ、精神の深層に死の仏教的イメージが潜在していることに副田氏が驚いたという。<sup>(4)</sup>

また、最近、生命科学者で、三十余年、原因不明の難病（それは、ようやく1999年になって、周期性嘔吐症という病気であることがわかった）に悩まされた柳澤桂子氏が、心身共に孤独のうちに長年苦しんだ末に、「般若心経」によって苦しみから抜け出すことができた。「般若心経」の現代語訳を柳澤氏は出版して、広く反響をよんだ。長い闘病生活の中で、柳澤氏は、基督教や聖書にも救いを求めたことがあったが、結局、柳澤氏を納得させたものは、お釈迦さまであった。現代科学に照らしても、釈尊がいかに真実を見通していたかに、柳澤氏は驚くという。<sup>(5)</sup>

このような方達の心の軌跡を知ると、長い年月に育まれた、日本人の心性にある仏教的なもの重みを深く感じさせられるのである。日本人の精神を支えるものとして儒教思想も忘れてはならない。

基督教に話をもどすと、半期の授業で基督教とは何か、福音書で、イエスはどんな教えをのべているかということだけでも、とても語りつくせないなので、受講生には授業の他に、イエスとの出会い、あるいは基督教との触れ合いによって自分の人生を決めたと

思える人々を通して、何がその出会いの核心であったと思うのか、それぞれ自分で考えてそのレポートを提出してもらうことにした。たとえば、マザー・テレサ、アルベルト・シュヴァイツァー、マキシミリアン・コルベ、シモーヌ・ヴェイユ、ドイツの「白バラ」シヨル兄妹、神谷美恵子、その他、自分の知っている、市井の無名の人でもよいと。具体的な人間をとおしてその背後のイエスを理解するのは、ただ受動的に、キリスト教やイエスについての説明を受けるより、意味のあることだと思う。この問題を考えるには、必ず各人が自分はイエスをどう理解するかという問いにつきあたるからである。

授業では、西洋から日本へキリスト教を伝えに来て、日本に長く住んで日本を愛し、ついに日本に骨を埋めた三人のカトリック司祭の方々を紹介して、三人三様の異文化とのめぐりあいを考えることにした。以下、その方々のポートレートである。

### 一. ヘルマン・ホイヴェルス神父 (1890～1977)

上智大学の学監、学部長、副学長を歴任し、四谷の麴町教会（イグナチオ教会）の主任司祭の任にもあったホイヴェルス神父は、ここに紹介する三人の司祭の中では、一番世に知られた存在であった。『聖フランシスコ・ザビエルの来朝』、『マグダラのマリア』、歌劇『細川ガラシャ夫人』、新作能『復活のキリスト』の作者でもあって、『細川ガラシャ夫人』は、中村歌右衛門の主演で歌舞伎座で公演され、『復活のキリスト』は、室生九郎演出で、水道橋能楽堂で演ぜられた。「日本人の心は、美術文芸をとおして最もよく表現されるものと考え、日本文学、ことに能、謡曲などの古典を研究してきましたが、幸いこの四十年のうちで、私の試みた拙い創作も、いくどかよき協力者のおかげでこれを発表することができ、心から喜んでおります。』<sup>(6)</sup>と神父は、書いている。



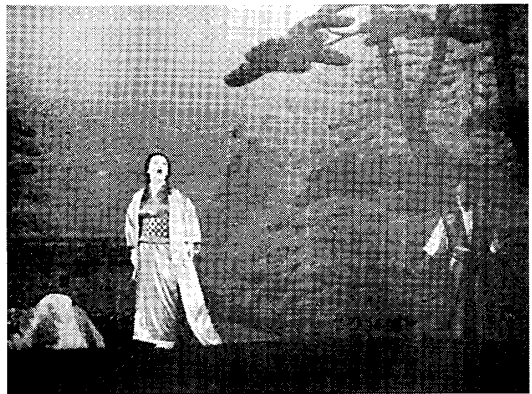
聖イグナチオ教会居室におけるホイヴェルス神父

ホイヴェルス神父は、一八九〇年ドイツのウエストファーレン州の生まれ。十九才でイエズス会入会。哲学課程終了後、ドイツ・イエズス会「インド宣教会」に志願した。ところが、第一次大戦後、イギリスとドイツとの関係から、ドイツ宣教師はインドへ行くことが難しくなり、ホイヴェルス神父は「日本宣教会」を志願した。来日前に、ハンブルグ大学で日本語と日本文学を研究した。

日本へは、一九二三年の、関東大震災の一週間前に到着した。最初はインド行きを志願し

たのであるが、神父は、この日本との出会いは、神の大なる賜物であったと感じた。北ドイツの静かな国に生まれた自分が、静けさの国日本に遣わされたのは、何かの深い縁に違いあるまいと。(7)

ホイヴェルス神父は、神のことを *der liebe Gott* 日本語として、「なつかしい神」とよんでおられた。これは神父自身の日本語訳であるが、大変にしっくりとした日本語である。神父の信仰の源は、「天地万物の創り主であり、いつも私達と共に在る、



歌劇『細川ガラシア夫人』の舞台 ガラシア夫人は大谷冽子

なつかしい神」から由来するものであろう。その信仰は、神父の両親から自然にさずけられたものであるが、同時に代々にわたる信仰厚いキリスト教の家庭から自然に生れ出た良き種という感じがする。どのような聖人が好きであるかと問われて、「私の思うには、二つのタイプの聖人があると考えるのです。まずはじめに、罪から神へ戻って、多く赦されたが故にたくさん神を愛する人。たとえば聖パウロ、聖アウグスチヌス…。一方には、まだ罪をあまり知らないで、しかも立派な愛の聖人となった人たちです。この人たちは聖ヨハネとか、聖ステファノ、聖ラウレンシオ、中世の聖ゲルトルーデリスなどです。」「カトリック教会の中では、後者が一番好きであります。たとえば聖者の中に、聖ステファノについて、彼らステファノの敵には、彼の顔があたかも天使のように見えたとあります。私は確かに理想としては、人が天使のごとき状態にあることを願うのです。そして、そのように一生涯を通じて神を愛すること。また、こういってよいかもしれない。罪から聖人に上げられた人は、少し火あぶりの匂いがします。』(8)

この言葉ほど、ホイヴェルス神父の信仰の特質をよく表しているものはない。万物を創り、御子イエスを世に与え給うた神への全き信頼。全ての創られたものを通して、宇宙の根源である神を讃美すること。これがホイヴェルス神父の全人格を貫くものである。神父に接することにより、人はその背後の大なるものを感知する。

ホイヴェルス神父の特長は、次の三つに集約されるのではないかと思う。独得のユーモア、聖なる人格、それに幼子のような単純、純粹、従順である。ユーモアといえはすぐに思いうかぶのは、好きな和歌として、「気の毒な偉い泥棒・石川五右衛門の辞世」をあげ、「世に盗人の種はつきまじ、この世に予言があったとしたら、この予言は世の終わりまでつづくであります。』(9)との解説である。一九七七年六月十一日の告別ミサの時に、にわか雨が降り、雷鳴がとどろいた。「あ、これはホイちゃん（ホイヴェルス神父の愛称）の天からのいたずらだ」と言った人があり、生前の神父の茶目な一面を知っている人々は、何とも言えない、あたたかい気持ちになったものである。

ホイヴェルス神父は、教理でも学識でも説教でもない。その存在によって人を信仰に導くことのできる、稀有な靈性を備えた司祭であった。それを最もよく物語っているのは、「模

範的な曾おばあさん」という随筆の中で紹介されている、信州伊那の中原ひでさんとの出会いである。このおばあさんの孫娘は、伊那から東京のカトリック系の保母学校に入り、カトリックの信仰を得て帰郷した。「ひとのみち教団」の信徒である両親の厳しい反対と迫害にあったが、両親は、結局娘に感化されてキリスト教へ導かれた。二代にわたる「ひとのみち教団」の篤信の信者であった祖母のひでさんは、頑強にキリスト教を拒否し続けていた。そのひでさんが、ホイヴェルス神父に出会って、キリスト教を受け入れた。

「八十才の年、自分の家ではじめて神父様にお会いして、その瞬間に信仰をいただいたのです。それは本当に不思議な瞬間でした。神父様は一目惚れといういきなお言葉でその時のことを表していらっしゃるんですが、玄関にお迎えに出た母は、神父様と目を合わせた瞬間に、この立派な神父様が信じられていらっしゃる信仰を私もいただこう、このお方にしたがっていこうと決心した。と後年私に語りました。」<sup>(10)</sup>とひでさんの娘さんが語っている。

美学者であり哲学者の今道友信氏の若き日の「断章」も忘れ難い。「夕かげに澄む冬近い湖の気高いたたずまいを望みながら」書かれた「空気への手紙」と題されたその断章は、ホイヴェルス神父の深く澄んだ靈性を語った文章の中で、最も美しいものの一つである。人間の表情が何故あるのか。それは隠すためと表すためである。私たちの魂が本当に透明で清らかであれば、隠す必要も表す必要もない。「もし心が純明になるとか、清らかになると、どういふ風になるか、考えてみませう。(さうなると、先づ澄み切った人になります。浅はかで見えすくといふのでもなく、一物ありさうで、何かわだかまってるといふのともちがって、深く澄むのです。(さういふ人に会ったことがない方は不幸だとおもひます)……心の純明とは、それゆゑ簡単に言へば、表情がうすくなって、心そのものが光り出して来るのだと言ってもよいでせう。」<sup>(11)</sup>

「なつかしい神」に対する幼子のような単純で純粋な信仰と同時に、司祭としてホイヴェルス神父は、教会の長上（上はローマ教皇にいたるまで）に対して絶対の従順を守った方である。それは権威に対する盲従とは全く質の違ったものである。伝統は厳守されたが、個々の司牧の現場では、まことに柔軟な判断を示すことのできた司祭であった。二十世紀のカトリック教会に最大の変化をもたらした第二ヴァチカン公会議<sup>(12)</sup>が開かれるずっと前から、ホイヴェルス神父は、カトリック教会の欠点には気付いておられたので、こうした変化に対しても、むしろ当然来るべき変化として、驚くことも、動ずることもなく受けとめられたのだと思う。地にしっかりと足をつけながら、常にこの世の人々や出来事を永遠の相の下にみている司祭であったように思われる。

日本の伝統文化の中で養われてきた日本人の宗教心を、ホイヴェルス神父は尊敬していた。「他国の姿を眺めることは裁くためではなく、むしろ存在の豊かさを味わうこと。」「尊敬と愛によって、その国の宝を発見すること」ができる。神父の経験では、理の働きだけでは日本をほんとうに理解することは不可能で、たとえば、詩人のポール・クローデルとか、建築家のブルノー・タウトのような直観性に恵まれた芸術家にとって理解が楽であろうとの言は

卓見である。<sup>(13)</sup>

日本のもつ深い霊性に心からの信頼を寄せながら、やはり、日本の伝統的な精神文化の中に、キリスト教がしっくりとおさまりきれないところがあることも、しっかりと見据えていた方である。「気持ちをおさえ、衝突を避け、妥協を求める」「他人の意見に寛大である、和をそこなってまでリクツを通さない」日本人の国民性を、よく理解し尊重した。「東洋は神のもの」という神父自作の詩は、日本の文化哲学をひじょうによく表現したもので、日本に対する深い尊敬がそこに読みとれる。<sup>(14)</sup>

竹山道雄氏が、一九二八～九年のドイツの様子を観察して帰り、帰国後にナチズムの起った素地があるように思うという印象を、ホイヴェルス師に伝えたところ、ホイヴェルス神父は否定もせず、「日本人の方がより深いところに根を下ろしている」と語ったという。竹山氏にとって、ホイヴェルス神父はよい外国人の友人であったようだ。<sup>(15)</sup>

四十四年ぶりに、故郷に帰ったホイヴェルス神父は、再び東京へ帰ってきた。彼の地で、「なぜホイヴェルス神父は再び東京へ帰るのか！　むしろ晩年は美しいふるさとで過ごしたほうがよくないか？」<sup>(16)</sup>と問われたが、当然のごとく、神父は、日本へ帰ってきた。日本を愛するが故であるが、「神が私の使命を日本においてお与えくださいましたこと」<sup>(17)</sup>を心から感謝するからでもあるのだ。

## 二. ウィレム・A・グロータース神父 (1911～1999)

『それでもやっぱり日本人になりたい』という本を、日本への遺書のように書き終えて一九九九年に日本で生涯を終えたベルギーのグロータース神父は、本心から「日本の土」になりたいと思っていたようだ。

ベルギーに休暇で帰っていた時に、思わず「早く家に帰りたい」と言って、母上を驚かせたという。<sup>(18)</sup>自分の生まれた家に帰ってきている息子が、東京を「自分の故郷だ」と感じている。ベルギーには生まれ育った土地としてのなつかしさはもちろんあった。しかし、グロータース神父にとって、言語も二つ、行政機関も二つで、南北に分かれ、国としての歴史がせいぜい百五十年というベルギー



グロータース神父

よりも、五十年も住み、日本の言語と文化が意識の深層にまで入り込んでいるように思われた東京のほうが、ほんとうの故郷だと感じられたのである。

「畳の部屋を造り、寝起きしてきたし、毎日話す言葉のほとんどは日本語。つまり、日本

人のように暮らしてきた。」「すでに日本に墓も買ってある。」「しかし、青い目、からす天狗のような高い鼻、とうてい日本人にはなり得ない。」<sup>(19)</sup>と嘆いたが、グロータース神父は、日本の言語と文化のふところに飛び込み、長年、そこに鼓動する日本人の心と触れ合っているうちに、日本に対する愛情が本能の奥深くに根を下ろしてしまっていて、ほんとうに日本が自分の祖国だと感じられるようになったようである。「生きて日本人にはなれないが、死んで日本の土になる。」<sup>(20)</sup>と決心したとおり、神父は日本に骨を埋めた。

急速な少子高齢化社会を迎える日本の行く手には、数々の難題が待ちかまえているだろうが、「常に地球全体に視野を広げながら、自信を持って未来に立ち向かっていただきたい。無限と言っていいほどの可能性を秘めてる日本人に、私は心から叫びたい。『日本人はすばらしい』と。」<sup>(21)</sup>二十一世紀を迎えようとしていた時に読んだこの言葉は、ほんとうに心のこもった私達日本人へのエールだと思い、心励まされたものである。そのグロータース神父が日本について語った言葉の中でも、とりわけ印象深いのは、日本人と敬語についてである。

日本語の特徴のうち、非常に特殊なものといわれているものに敬語があるが、敬語というものは、フランス語にも英語にもあるから日本語独得のものではない。イギリスやフランスで生活し、よいしつけと礼儀作法の現地教育を受ければおのずと身につけていく類のものであると、グロータース神父は言う。しかし、日本語の敬語にみられる特徴は、それとは違っている。日本語の敬語については、日本人の心と魂の特徴を検討することがまず大切で、言語はそのあとをついてゆくにすぎないのだと。<sup>(22)</sup>心と魂と言語との結びつき。その示唆は極めて意味深いものである。

グロータース神父が、言葉と文化との関係に対してこれほど鋭敏なのは、神父がベルギー生まれであることと深い関係がある。「二つの言葉で育った」とある通り、グロータース神父は、ベルギー南部のフランス語圏で生まれた。ベルギーの北半分はオランダ語圏である。父の母国語はオランダ語、母の母国語はフランス語。家庭内の言語はフランス語であった。

小学校二年までフランス語で育ったが、小学校二年で、高校の教師であった父の転勤で、オランダ語地域の小学校に通わされた。わが子をフランス語とオランダ語の二重言語使用者に育てようという、父の明確な意図によるものである。<sup>(23)</sup>二重言語使用者には二つの言語がどちらも中途半端になり、二つの文化にはさまれて自分がどちらに帰属するかに悩まされる危険も多いものである。グロータース神父の父君は、ほんとうの二重言語はその人の教養と文化の幅を広げる、価値あるものであるという確信をもち、子供たちに二つの異なる言葉を自分の言葉として、身につけさせた。オランダ語はゲルマン系、フランス語はロマンス語系で、発音も文法もまったく異なっている。

このような生育歴をもつグロータース神父は、一種の条件反射で、祖父母や親類の人々に対して、オランダ語とフランス語の表現、話題、身振り、対応を使い分ける術が身につけていったという。その著書に示されているグロータース一族の言語地図は、<sup>(24)</sup>まことに興味深い。神父の六人きょうだいは、みな二重言語使用者であったという。

十二才の年の祈りの中で、「わたしを愛するなら、わたしを知らせたらどうか」というイエスの招きを感じたグロータース神父は、十九才でベルギーのイエズス会修練院に入り、聖職者を志した。卓越した言語の能力を見こまれて、国内で言語教師となり、西洋古典語を教えるはどうかと院長に言われ、アフリカへ宣教を望んでいた神父は、イエズス会を去り、スクート会（淳心会）に移った。スクート会は、中国での宣教を目的に創設され、アフリカやフィリピンへも宣教師を派遣していたのである。

健康上の理由で、熱帯の地アフリカ行きは断念し、中国へ派遣されることになって、神父は、中国語の文法習得、古典講読、三千字の漢字の学習に専心した。中国語文法の専門家として世界的に有名なミュリー神父の指導を受けた。発音は、現地に行くまでは、変なくせがつかないように、とのミュリー神父の信念により、教わらなかった。<sup>(25)</sup>一九三九年北京から大同の地へ赴任してみると、北京で習得した北京語がその地ではまったく通じないことを知り、方言の猛勉強を始めた。方言学



日本の宿屋でくつろぐグロータース神父

に打ち込み、中国の方言地図も作った。この猛勉強が日本で大変に役立つことになったのである。

共産党政権下の中国での宣教活動が不可能となり、一九五〇年にグロータース神父は、漢字の国日本を希望し、日本に赴任した。一九五五年秋から世田谷の松原教会に着任し、以後四十九年間をこの教会で過ごした。

この年、神父は、言語学者柴田武氏の知遇を得て、日本の方言調査へ加わることができた。以後二十年間、柴田氏が責任者であった国立国語研究所の『日本言語地図』全巻の作成に関与した。また都立大学平山輝男教授の縁で、都立大学、天理大学、上智大学、清泉女子大学などで、「言語地理学」を講師として教えた。

方言は、標準語以上に、その民族の心性と魂を映し出す。神父は、日本中をサイクリングで探検しようと決心し、三十六年間で、日本中の全部の県をまわった。三等車に乗れば、その国のありふれた庶民の素顔が見えるように、自転車による全国踏破によってグロータース神父は、本当の日本の風景や人々に出会うことができた。日本の宿屋に泊まり、日本人庶民のたくましさ、やさしさ、親切さに接した。

また、日本の新聞の日曜版などにみられる日曜歌壇や日曜俳壇に、ごく普通の人々が、これほど多く投稿していることにも、神父は日本人の詩心、文化の高さを感じ取っている。半世紀を通じて、肌でもって感じ取った日本人の魂と心性。日本人自身ですら、十分に自覚してはいないかも知れない日本人の美質と潜在的な能力。それが「無限と言っていいほどの可能性を秘めている日本人に、私は心から叫びたい。『日本人はすばらしい。』」という言葉に



なったのではないだろうか。ホイヴェルス神父は日本人の心の特徴がよく現われているとして「いただく」「捧げる」「落ち着く」を美しい日本語だと思ったが、<sup>(26)</sup>グロータース神父も同じように感じただろう。「もったいない」「罰があたる」という言葉も、そのように感じられたに違いないと思う。

仏教の信仰が生活の中心だったという八十二才のおばあさんの話は、とりわけ印象深い。そのおばあさんは、長野県に住んでいて、信心について彼女は、決して自分から口にはしなかったが、仏さまにご飯の御供えをし、亡夫の供養をする。その自然さと真心のこもった態度に、グロータース神父は深く心を打たれた。ある日、彼女は、自分の信仰の根本について、次のように語ったという。

「私の人生で唯一の頼みの綱は阿弥陀さまです。私が祈っているのは、阿弥陀です。阿弥陀さまの救いを信じてすべてを委ねているのです。」<sup>(27)</sup>この、無限の力と無限の慈悲にあふれた阿弥陀への絶対的な信頼と帰依。グロータース神父は、北京の信心深い仏教徒の集会で聞いた言葉と同じことに驚く。インドから渡来した仏教が、それを受け入れた中国と日本人々によってどんなに大きく修正されたのかと。自分を至上者、全能者と宣言しないのが釈迦牟尼の根本思想だとグロータース神父は理解しているが、このおばあさんの信仰は、ほとんど一神教の神へのそれと変わらないのではないと神父は感じたのである。<sup>(28)</sup>「唯一の至上者、すなわち世界中のすべての偉大な哲学者や宗教思想家が探し求めていた絶対者の礼拝。そしてこの絶対者への献身。」それを、このおばあさんと、神父自身が共有していることを、感じ取ったのである。

グロータース神父が、日本人をすばらしいと賞讃する時、このおばあさんのような魂と心性とを、日本人が潜在的に所有し、それがグロータース神父自身の魂と深くつながっていることを自覚しているのだと思う。それを、あえて、仏教とかキリスト教という名で表現しなくてもよいのではないかとさえ感じてもおられたのではないかと推察する。共有している貴い価値をこよなく大切なものと信じること。そこに、グロータース神父の明るさがある。

### 三. ゲオルグ・シュトルム神父 (1915～2004)

スイスのシュвейツ県に生まれ、一九五一年に、ベツレヘム外国宣教会<sup>(29)</sup>から日本に派遣され、岩手県二戸市の二戸カトリック教会の主任司祭として四十年以上司牧にあたっていたゲオルグ・シュトルム神父が世に知られるようになったのは、伐採の進む山に、木を植え続けて、その功を認められて、農民文化賞、岩手日報文化賞、国際ソロプチミスト賞などを受賞してからである。二〇〇二年十一月のことである。

その少し前に、『青い眼に映った、茅葺の詩情』という画文集が、二戸市の市民グループ「Waの会」の支援を得て出版された。これは、長年、シュトルム神父が水彩画帳に描きためておいた二戸周辺の茅葺屋根の民家や北国の農村の風景に、二戸市の教育委員をつとめたこ

ともある、エッセイストの国香よう子さんが文章を添えたものである。国香さんは、二戸在住四十年の神父の姿を見知ってはいても、実際の出会いは一九九五年五月の神父の童話集『幸福の種』の出版記念会であった。神父の、人知れぬ植林の仕事を、国香さんを始め、二戸市民の多くは気付かなかった。晩年の五年間に神父の業は市民に知られることになった。

シュトルム神父の父はドイツ人で、第一次世界大戦中に若くして戦死した。母は深い信仰をもったフランシスコ会の会員で、<sup>(30)</sup> 神父の信仰は、この母からの感化によるものである。五人の子供をもって寡婦となった母は、農作業をやっているおじのもとに移り住んだ。草花や、植物、魚などに接して、貧しい質素な生活の中で、子供たちは、農作業や畜産をはじめ、多くの労働の経験実地を積んだ。

中国での布教を志し、一九四六年に中国にわたり、天津の南開大学でドイツ語を教えながら布教活動にあたっていたが、共産主義政権のために中国での布教は困難となり、一九五二年に来日した。この事情は、グロータース神父の場合と似ている。

シュトルム神父は、日本に来て、二戸教会の主任司祭となる前に、岩手県藤沢町大籠教会に派遣されている。その大籠教会は、ひっそりとした寂しい、小さな教会で、今は無人になっているとのこと。一九五二年、神父は、酪農指導のためにここに招かれ、その後、同じ岩手の水沢教会を経て一九五五年から二戸教会に主任司祭として移られた。

大籠教会では、酪農指導をやるつもりで意気込んでいたところ、転任となり実現しなかった。スイス生まれで、酪農に通じていたシュトルム神父は、牛の飼料にする牧草の種も、草刈ガマも故国スイスから取り寄せるほどの熱の入れようであったという。

薬草にも詳しい神父は、それで命を救ったこともある。教会のまわりにも、スギやラクヨウなど植林していたそうだ。農業指導のために日本に派遣されたと自覚していた神父は、カトリック畜産農家を育成するのを夢みていたのかも知れない。しかし、当時の司教は、神父は労働してはいけないという考えのようであった。もっと、宣教活動をすべきであるという考えであったのだろう。当時、信念をもち、本当に質素な生活をしている「率先垂範」のこの神父のまわりには、若い人が集まり、教会の信者も増えていったが、それ以後、今日まで過疎化が進んでいる東北の農村での畜産事業は困難が多く、実りの少ないものとなったのかもしれない。

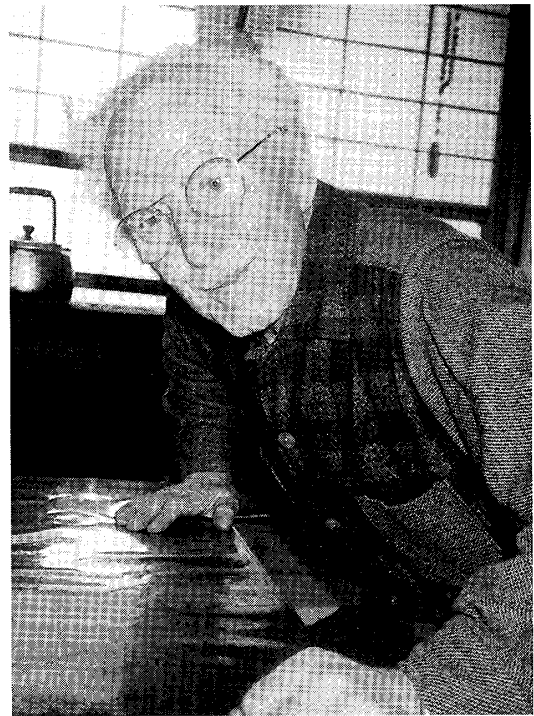
シュトルム神父が二戸に赴任した当時、一軒一軒民家を訪ね歩いて「キリスト教に関心が



岩手日報 日報文化賞の記事

ありませんか」と問いかけたそうであるが、「関心がある」と答えた家は一軒もなかったという。大籠の農家の人々に、シュトルム神父は忘れることのできない良い思い出を残されたようで、自分が死んだら和尚さんなど頼まないでシュトルム神父にお願いしたいと言った人もあったが、その数はごく少数であったろう。<sup>(31)</sup>

シュトルム神父が四十年以上住んだ二戸教会は、もともと日本人の伝道師のために建てられたものである。いたって簡素な日本家屋で、八畳二間が聖堂となっている。ヨーロッパ人の神父にふさわしい家を建てましょうという申し出を断られた。戸外にある手洗いを、高齢の神父のためせめて室内に作らせてほしいという信徒の願いも頑として断られた。自分のために余分な出費は一切無用であると。



シュトルム神父 二戸教会にて

自ら農作業をされ、食生活もほとんど自給自足。冷蔵庫も石油ストーブもない。冬の間は、薪ストーブで暖をとる。その燃料とする枯れ木、たき木を集めに山に出かけることは、一種のスポーツとなり、レクリエーションとなる。

馬溯川沿いにある二戸市は、平地の少ない土地である。二戸教会の裏山の奥に、二戸市が山を造成して作った市営の野球場がある。そのまわりの斜面に、神父は、二戸市の許可を得て木を育て始めた。裏庭で、一人で種から苗木を育て、一本一本を地道に植え続けた。木によっては、三年がかりでやっと芽を出すものもある。時には歩いて、時には自転車で、里山に苗木を運び、雑草を抜き、黙々と植え続けた。二十年間に、種から植えて育った木々は、五十種類以上で、松、桜、ハリギリ、メイプルツリーなど、二千本以上にのぼる。南仏プロヴァンスの作家ジャン・ジオノの小説『木を植えた人』の老農夫エルゼアール・ブフィエを思わせるものがある。ただし、あれはジオノがこうあれかしと夢想した物語であるが、シュトルム神父の植林は、本当の話である。自分は大きな仕事をするのが大好きで、百年先を計画に入れて木を植えます。神様のやることは大きいと。「私は自分の好きな木を植えるのではなく、土の求めている木を植えます。…私は専門家に聞いてからやっています。針葉樹の葉は肥料にならないので土がやせます。しかし、モミの木の中にブナを植えれば、モミが枯れた後、ブナ林になります。林業の上手なやり方は、自然に交替させることです。』<sup>(32)</sup>

長年にわたりシュトルム神父に師事し、神父に宮沢賢治の童話を紹介した岩手医科大学教授の黒澤勉氏は、神父の木の植え方は、人間の管理の下においてこそ、木は豊かに成長するのだと述べている。たとえば寿命の長いドイツウヒやイチイを育てるために、ニセアカシアの皮をはいで殺し、はびこらせないようにすることなど。<sup>(33)</sup>木を一斉に伐採するより、間

伐して切り株を残す。切り株は、自分が腐っていくことで、多くの生命を与え、動植物の命をはぐくみ育てるのだという神父の童話「切り株」についての黒澤教授の解説は深い示唆に富んでいる。<sup>(34)</sup>

エドヒガンザクラも植えてある。エドヒガンの寿命は三百年もあるという。その種は、二戸市の「宝の巨木」に指定されている愛宕神社の種を拾い育てたものである。三十年、五十年の後に、この樹が大木となって、その木蔭に憩う人々、子供たちが野球に興ずることであろう。そのことを夢みて木を植える神父の「時」は、人間の時ではない。また播かれた種は神父の死後も育ちつつある。

二〇〇四年秋からの授業に先立ち、三人の司祭の方々のうち、シュトルム神父ただ一人、まだお元気で司牧にあたられていたので、私は二〇〇三年十二月のクリスマスに、二戸教会に神父をお訪ねした。授業をして学生達の反応や疑問などお伝えに来ますと約束してお別れしたが、秋の授業を待たず、七月に肺炎のため、シュトルム神父は八十九才の生涯を終えられた。その時の会話で最も強く心に残った言葉。

「自分は、環境保護の運動家だと思われているようだが、それは違います。(その否定の語気の鋭さに、驚かされた。)自分のやっていることは、創造主の御業を輝かせるためです。なかなかそれをわかしてもらえません。」ドイツウビの話といい、「切り株」のたとえといい、シュトルム神父の植林は、人間の尺度だけで評価することのできない仕事である。

「私の信仰は母からもらいました。母の感化は限りなく大きい。人間を育てる時、女性の力はまことに偉大です。」

「日本では、キリスト教の宣教活動のために、幼稚園を作ることから始めるでしょう。でもあれは間違いだと思います。大人への宣教が一番大切です。」東北地方だけをみても、カトリックの修道会やプロテスタントのミッションは、まず幼稚園や初等教育の場から宣教活動を始めることが多い。それにはよい面もあるように思う。この点についてもう少し神父のお考えを聞きたいと思っていたが、それはかなわぬこととなった。

最晩年に、シュトルム神父は、静かな死を思わせる物語を書きながら、自身の死の準備をしておられたらしい。死が近付くにつれて、フランシスコ・ザビエルのことをよく思い出されていたようだという。シュトルム神父の、ザビエルへの問いは、「どうしてあなたの時代に、日本人は、あんなにも多くの方がカトリックになったのか」であった。

「それは自らの布教があまりにはかどらぬことや、日本人のキリスト教、あるいは宗教そのものへの無関心に対する深い嘆きから発せられる問いだったと思」<sup>(35)</sup>うと、神父の一周忌を期して、『ロザリオ堂の歌ごえ』と題する追悼文集を編まれた黒澤勉教授は解説されている。確かに、二戸の地の信徒の数からいえば、四十年あまりにわたる司牧の年月からみて、そして「その偉大な深い宗教的人格や豊かな教養の割には、あまりに寥々たるもの」<sup>(36)</sup>であったろう。東京などの大都会と違って、人や地域、お寺とのつながり、墓地や位牌の問題など、地方独特の宗教とのつながりを考慮すべき事柄もあるに違いない。

けれども、この深い孤独感は、三千人を越す人々に洗礼を受けたホイヴェルス神父ですら最晩年に近く、信頼する信州伊那の信徒に、「良く働いてくれてありがとう。同じようにたくさん種を播いてもなかなか芽が出なかった。花も咲かず実も実らなかった。その中でよく実らせてくれた。」<sup>(37)</sup>と語られた心境と相通するものがあるように思われる。異った文化と歴史をもつ風土に宣教することに内在する本質的な難しさを、ホイヴェルス神父もシュトルム神父も身をもって体験されたのだと思う。ホイヴェルス神父に長年師事された、『甘えの構造』の著者土居健郎氏の「ホイヴェルス神父の使命」(『ホイヴェルス神父—信仰と思想』所収)はこの点について多くを教えてくれる。

しかしシュトルム神父の播いた種は、「神父様の死後も育ちつつある」という黒澤教授の言葉は真実なのではあるまいか。神父の植えたエドヒガンザクラは、三百年の寿命をもつ。三百年後に、人の心に播かれた種がどのような成長をとげるのか、浅はかな人間の知恵では誰一人としてはかれない。

## おわりに

三人の司祭の方々、それぞれに、自分の生まれ故郷から遠くへだたった地に半世紀もとどまり、そこで生涯をおえられた。その人なりに淋しさ、あるいは挫折感も時には感じておられたに違いないが、神にのみ、自分の生涯が知られることを望み、それをよしとして、一生をささげ、それに満足して心満たされて日本の土となられたことに疑いはない。長い伝統をもち文化、社会制度、習俗とも密接に結びついた宗教、たとえばキリスト教と仏教が、人の心にあって、何の違和感もなしにとってかわられることは難しいことではないだろうか。

インドのコルカタで、路上の死にゆく人々を連れ帰り、その多くを心をこめて看取ったマザー・テレサが、自身は敬虔なカトリックの信者でありながら、死んでゆくそれぞれの人に、宗教をたずね、どのように葬ってもらいたいかを確かめて、キリスト教徒はキリスト教で、ヒンズー教徒はヒンズー教で、仏教徒は仏教のやり方で葬ったことには、深い知恵がかくされているように思われる。

## 註

- (1) 笠井恵二『ブルトマン』清水書院 3-4頁。
- (2) 田川建三『キリスト教思想への招待』勁草書房 2004 i頁。
- (3) 同上 i-ii頁。
- (4) キリスト教との接点を多くもっている神谷美恵子さんは、亡くなった時、無宗教でお葬式をした。仏教に親近感を抱く夫君への配慮もあったと伝えられた。

- (5) 柳澤桂子『生きて死ぬ知恵』小学館 2004 44頁。  
 (6) ヘルマン・ホイヴェルス『人生の秋に』春秋社 1969 286頁。  
 (7) 同上 30頁。  
 (8) 同上 330-331頁。  
 (9) 同上 247頁。  
 (10) 同上 194-198頁。  
 土居健郎・森田明編『ホイヴェス神父—信仰と思想』聖母文庫 2002 204-205頁。  
 (11) 今道友信「断章—空へへの手紙その他」『この世を生かすもの』春秋社 1962 80-85頁。  
 (12) 1962年から1965年までに開かれた、教会史上21回目の公会議。教皇ヨハネ二十三世によって招集され現代世界への適応を考え、多くの刷新と改革がなされた。  
 (13) ヘルマン・ホイヴェルス『人生の秋に』283頁。  
 (14) ヨゼフ・ロゲンドルフ『異文化のはざま』文芸春秋 1983 193-195頁。

東洋は騒ぎの中の静かさを愛する。  
 それでひとは喜んで蟬に聞き入る。  
 香油のように沈黙は心をうるおす。  
 ささやくように徳はひっそり花を開く。

魂は知ることもよりも暗いことが好きだ。  
 前堤を骨折って求めることは稀にしかない。  
 秘密の方が堂々とした結論よりも  
 はるかに多く魂を楽しませる。

矛盾を恐れるものは一人もなく  
 罪を悔いるものもあまりいない。  
 人々は夢見心地で世間をわたり  
 クリスマスはどのようにして悩むかと驚いている。

ロゲンドルフ神父は、やはり、イエズス会の司祭で、長年、上智大学で比較文学を講じた。ホイヴェルス神父は、慎み深い日本人の世界観を理解するのにひじょうに力になって下さった方だとロゲンドルフ神父は感謝し、この詩を紹介している。

- (15) 仙北谷晃一「竹山道雄の文化遍歴 ハーンとの関連を中心に」叢書 比較文学比較文化2『異文化を生きた人々』中央公論社 1993。  
 (16) ヘルマン・ホイヴェルス『人生の秋に』407頁。  
 (17) 同上 301頁。  
 (18) ウィレム・グロータース『それでもやはり日本人になりたい』五月書房 1999 230頁。  
 (19) 同上 229-230頁。  
 (20) 同上 230頁。  
 (21) 同上 232-233頁。  
 (22) 同上 167-169頁。

この指摘に関心を持ち、I期生の小杉佳奈さんが朝鮮語と日本語の敬語を比較した卒業論文を書いた。

- (23) 同上 14頁。
- (24) 同上 22頁。
- (25) 同上 44頁。
- (26) ヘルマン・ホイヴェルス『人生の秋に』285-286頁。
- (27) ウィレム・グロータース『それでもやはり日本人になりたい』143-147頁。
- (28) 同上 147頁。
- (29) 「ベトレヘム会はペトロ・ボンドルフィを創始者として1921年、スイスに設立された組織である。正式な名称を「カトリックベトレヘム外国宣教会」という。岩手にベトレム会の司祭達が来るようになったのは、仙台教区長浦川和三郎が当時の総長ブラッテル神父に宣教協力依頼の書簡を書き送ったところ、総長がこれを受諾したことに始まる。1948年のことである。」ゲオルグ・シュトルム『幸せの種』の後書きに黒澤勉岩手医科大学教授が書いておられる。
- (30) アシジのフランシスコによって創設された修道会の流れをくむ修道会で、在俗有志のための団体。
- (31) 黒澤勉教授の後書きに拠る。
- (32) ゲオルグ・シュトルム『幸せの種』134頁。
- (33) 同上 133-134頁。
- (34) ゲオルグ・シュトルム『子山羊とフランス』岩手日報社 1993 133頁。
- (35) 黒澤勉編『ロザリオ堂の歌ごえーゲオルグ・シュトルム神父を偲ぶー』1-2頁。
- (36) 同上 2頁。
- (37) 土居・森田編『ホイヴェルス神父—信仰と思想』209-210頁。

#### 参考文献

- 田川建三『キリスト教思想への招待』勁草書房 2004
- 笠井恵二「人と思想シリーズ46」『ブルトマン』清水書院 1991
- ヘルマン・ホイヴェルス『この世を生かすもの』春秋社 1962
- ヘルマン・ホイヴェルス『日本で四十年』春秋社 1964
- ヘルマン・ホイヴェルス『人生の秋に』春秋社 1969
- 田村襄次『わがヘルマン・ホイヴェルス神父』中央出版社 1987
- 土居健郎・森田明編『ホイヴェルス神父—信仰と思想』聖母文庫 2002
- ヨゼフ・ロゲンドルフ『異文化のはざままで』文芸春秋 1983
- ウィレム・グロータース『それでもやはり日本人になりたい』五月書房 1999
- ウィレム・グロータース（柴田武訳）『誤訳—ほんやく文化論』五月書房 2000（三省堂新書の復刊）
- ゲオルグ・シュトルム『子山羊とフランス』岩手日報社 1993
- ゲオルグ・シュトルム『幸せの種』信山社 1998
- 黒澤勉編『ロザリオ堂の歌ごえーゲオルグ・シュトルム神父を偲ぶー』橋本印刷 2005
- 柳澤桂子『生きて死ぬ智慧』小学館 2004
- 平川祐弘編 叢書 比較文学比較文化2 『異文化を生きた人々』中央公論社 1993